

平成28年2月19日～3月9日

ホツマツタエ講座

現アスス暦（太陰太陽暦・2倍化暦）の元は、
春日神が考案した「1日の昼夜を2日とする」原アスス暦だった

ホツマツタエ研究家 吉田六雄

まえがき

日本書紀の望（満月）について、神武天皇～景行天皇紀までの記述を調査して見ました。だが、全く「満月」、満月を意味する「望」の記述はありませんでした。一方、アスス暦の御世（21年～843年までの823年間）においては、望（満月）が11回も記述されており、アスス暦の暦法は、日本書紀に勝る共劣らない暦法になっておりました。なお、この間の御世は、初代タケヒトのスメラギ（天皇）の就任前～第十二代タリヒコのスメラギ（天皇）の55年までになります。

これまでの私の研究の大半は、スス暦、アスス暦の研究です。この間に、「アスス暦は太陰太陽暦である。」ことを立証して来ましたが、世にも不思議な記述になりますが、アスス暦に二十一月の妊み月が記述され、長寿で百歳以上のスメラギ（天皇）が約70%以上も存在している。また、熊本県八代海で昨今、旧暦の八朔に見られる「不知火」が、日本書紀、ホツマツタエでは、「五月初日に見られた」との記述になっていることです。この不知火の現れる月の原因を詳細に調査して見ますと、現アスス暦は2倍化暦（長暦）で作成されていたことが判明して来ました。更に、現アスス暦を天上の望（満月）と対比とている内、現アスス暦の前暦に春日神が作った原アスス暦の存在が浮かび上がって来ました。

結論を先に掲載しますと、現アスス暦は2倍化暦になっていることは、周知の事実です。だが、今まで暦法、特にエトの連続性で説明されるアスス暦、日本書紀暦の前では、2倍化暦はエトの数が半分になるため、連続性で否定されて来ました。だが、春日（神）が「暦名をアスズとせんや」とした時の暦は不明ですが、スス暦とアスス暦の記述を比較し、複雑な太陰太陽暦の暦法より判断しますと、古代暦→太陰太陽暦に一気に改暦できたとは思えないようです。恐らく、「1日を8穂で数えていた」スス暦の延長案で、「1日の昼夜を2日と数えた」原アスス暦が作成されていてことが濃厚になって来ました。そして、後世の人が、原アスス暦の暦日より近代暦の現アスス暦に作り替えた時、結果的に2倍化暦になったと推定されるようです。詳しくは、次頁以降をご覧くださいと幸甚です。

I、ホツマツタエの記述

1、アスス暦、望（満月）の記述

ホツマツタエよりアスス暦の満月の記述を抜粋した結果、表1のように11個の望（満月）が記述されておりました。

表1 望（満月）の記述

NO,	綾 NO,	望の記述	アスス穂	御世	月	月相
(1)	31-22	七十六年 睦月の望	133	76	1	望
(2)	31-56	(五年)サヤト (18) なが望	138	5	9	望
(3)	32-8	十八穂春 初望	445	18	1	望
(4)	32-42	十一年弥生 望	514	11	3	望
(5)	32-60	サ（五月）の望	573	13	5	望
(6)	36-3	十五年の 如月望に	703	15	2	望
(7)	37-22	ネ（十一）月望	721	33	11	望
(8)	38-4	師走望	790	2	12	望
(9)	38-8	四穂如月望	792	4	2	望
(10)	38-27	ハ（八）月望	800	12	8	望
(11)	40-29	師走の望	829	41	12	望

2、経過日数より月相値の差の計算方法

表1の11個の望（満月）について、ホツマツタエの年月望の記述が、暦法に基づいた正しい記述か否かを月相値の差により検証して見たいと思います。検証の方法としては、

- (1) 望（満月）から次の望（満月）の経過日数を計算する。
- (2) 経過日数を1朔望月でわり算し、月相値の差を算出する。

（注記）経過日数と1朔望月は、アスス暦の太陰太陽暦（吉田説）と儀鳳暦を使用し別々に計算する。

(3) 判定結果

誤差を考慮し月相値の差は「±1」以内、「1日月」以内を記述の望（満月）と計算の望（満月）が合致している判定し「○」印としました。

表2 月相値の差の判定基準

NO,	初めの年	終わりの年	月相値の差	月の形	アスス暦の記述
(1)	望	望	±0～±1	新月～1日月	○（正 確）
(2)	望	望	±2～±3	2日月～3日月	△（許 容）
(3)	望	望	±4～±15	4日月～満月	✕（不正確）

3、経過日数と1朔望月

今回は、ホツマツタエの望（満月）の記述の検証であるため、経過日数の計算は、アスス暦の太陰太陽暦（吉田説）を使用することにします。また、天文学との比較のため、儀鳳暦（シナ暦）を併記することにした。

（1）経過日数

- ①アスス暦（太陰太陽暦）の経過日数は、先に発表済の「アスス暦の太陰太陽暦の論文」より、19年発生パターンNO, 1年の日数、月数を表3に引用しました。
- ②儀鳳暦の1年の日数、月数は、日本書紀暦日原典の末巻の儀鳳暦の計算式を引用し、吉田が計算したものを表3に転記しました。

表3 発生パターンNO, 毎と1年間の日数、月数

19年発生	アスス暦(太陰太陽暦) 吉田説		儀鳳暦 (吉田計算)	
パターン NO,	1年の日数	月数	1年の日数	月数
1	384	13	384	13
2	384	13	354	12
3	324	11	355	12
4	384	13	384	13
5	384	13	354	12
6	325	11	384	13
7	384	13	354	12
8	384	13	355	12
9	324	11	384	13
10	384	13	354	12
11	385	13	354	12
12	384	13	384	13
13	324	11	355	12
14	324	11	354	12
15	384	13	384	13
16	385	13	354	12
17	324	11	383	13
18	384	13	355	12
19	384	13	354	12
19 年間の日数	6939	—	6939	—
1月の平均日数	29. 5276549759308 (76年平均)		29. 5276595744681 (19年平均)	

4、月相値の差の計算結果と見解

暦法に基づいた正しい記述か否かを判定するため、表1の11個の望（満月）の月相値の差を、計算したのが表4になります。

その結果、月相値の差は、

- (1) アスス暦では、若干バラツキがあるが、経過年数が30年以内は「±1.8日以内」、70年以内では「±2.8日以内」のズレ月でした。
- (2) 儀鳳暦はバラツキ少なく、30年以内は「±0.8日以内」、70年以内では「±2.5日以内」のズレ月でした。
- (3) 70年超の各2件は、±4日、±11日とズレ月大であった。
- (4) 見解

ズレ月の許容月を「±3日月以内」としますと、経過年数が70年以内でも僅かに3日月に治まるアスス暦、儀鳳暦であり、暦法は正しいと判断できるようです。このことから、ホツマツタエの望（満月）の記述は、「正しかった」と判断されるようです。

だが、暦法、望（満月）の記述は正しかったが、アスス暦、日本書紀暦としては、2倍化暦（長暦）の未解決案件が残されたことになります。

- (5) アスス暦（太陰太陽暦）記述を基に逆算した吉田暦の評価

表4より、天文学的に作られた儀鳳暦と同等な暦と判断されるようです。

表4 望（満月）の月相値の差と判定

NO,	ホツマツタエの記述		アスス暦		儀鳳暦
	望～望の年月日	経過年	経過日数		
			1 倍		
			1 朔望月		
			29.530589		
			月相値の差		
(8)～(9)	790 年 12 月望～792 年 2 月望	約 2 年	0.00008		0.166
(1)～(2)	133 年 1 月望～138 年 9 月望	約 5 年	1.251		-0.141
(9)～(10)	792 年 2 月望～800 年 8 月望	約 8 年	-1.824		-0.836
(6)～(7)	703 年 2 月望～721 年 11 月望	約 18 年	-0.719		-0.721
(10)～(11)	800 年 8 月望～829 年 12 月望	約 29 年	0.434		-0.630
(4)～(5)	514 年 3 月望～573 年 5 月望	約 59 年	-2.813		-2.159
(7)～(8)	721 年 11 月望～790 年 12 月望	約 69 年	-1.645		-2.498
(3)～(4)	445 年 1 月望～514 年 3 月望	約 69 年	-2.576		-2.551
(5)～(6)	573 年 5 月望～703 年 2 月望	約 130 年	-4.181		-4.470
(2)～(3)	138 年 9 月望～445 年 1 月望	約 307 年	-11.36		-11.36

（注記）表4は、表1に対し経過年順に並べ替えてあります。

Ⅱ、アスス暦研究の未解決案件の整理

1、ホツマツタエに記述される2倍化暦の根拠と自然現象

この項は、「まえがき」の内容と重複しますが、アスス暦の御世には、「世にも不思議な記述」があります。アスス暦には、2倍化暦を想像させる記述の

- (1) 二十一月の妊み月（現在人の妊娠期間は十月十日）が記述され、
- (2) 長寿で百歳以上のスメラギ（天皇）が約70%以上も存在する。
- (3) また、熊本県八代海で昨今、旧暦八朔（注記）に現れる「不知火」が、日本書紀、ホツマツタエでは、「五月初日に見られた」との記述になっており、2倍化暦→1倍化暦への変換暦を作成し検証して見ますと、五月初日→9月1日が得られ、今日の不知火が現れる日が再現できるようです。

（注記）旧暦八朔（西暦換算）：8月25日～9月22日

変換暦

不知火の現れる月の原因を推測するため、左列に2倍化暦を右列に1倍化暦を並べた二つの暦を作成します。そして、左列に置いたアスス暦の偶数年の「五月初日」より右列の1倍化暦の「年月」を読みます。すると、「9月1日」を指すことになります。

2、アスス暦を長年研究して来て

ホツマツタエを手にした時、日本書紀暦と同じ年代であることを、前任の研究者がある本で説明してくれていました。だが、アスス暦の詳細な暦法までは、未掲載でした。（解読できてなかった。）このことが元で、アスス暦を長年研究し、「アスス暦の太陰太陽暦は、現実だった！！」を発表して来ました。だが、アスス暦の太陰太陽暦は、日本書紀暦と同様に、2倍化暦（長暦）でした。

更に、前述しましたが、アスス暦、儀鳳暦の経過日数を天文学的に1朔望月で月相値の差を検証しておりますが、その結果でも、ホツマツタエの望（満月）の記述が正しいことが判明しました。それでも、アスス暦の2倍化暦（長暦）の疑いが未解決のまま残されるようです。

3、スス暦を長年研究して来て

ホツマツタエには、アスス暦の前に「スス暦（吉田命名）」が存在します。この暦の基本は、「ホツマ・エト」であり、60穂で1枝、1000枝で1鈴と数え、アマテル神が生まれた年は、21鈴125枝31穂と記述されております。またの表示を1207, 531穂としております。（計算の詳細は略します。）

そして、穂を年と同じに表現しておりますが、近代の暦の基本である、年月日、日エトの並びの記述はありませんでした。（このことは、スス暦の当時は、太陽暦の365日を1年とする暦の記録がなかったことになります。）

Ⅲ、スス暦とアスス暦の比較

スス暦、アスス暦は、ホツマツタエの基本です。二つの暦の記述と解説結果を表5のようにまとめましたが、スス暦は、現在の知識では不明な古代暦です。アスス暦は、近代暦の知識で作られた太陰太陽暦でした。28アヤ(綾)65には、「時に春日・・・暦名をアスズとせんや」と記述あり、一言で古代暦→太陰太陽暦に変更されておりますが、表5の分析結果では二つの暦法が余りにも違い過ぎ、一気に古代暦→太陰太陽暦に改暦した記述は、安易な記述と察せられます。

(1) 原アスス暦は、1日の昼夜を2日と数えていた(吉田説)

スス暦の古代暦→アスス暦の太陰太陽暦に変更される前に、スス暦に似た「1日を昼夜で数えていた」原アスス暦の存在が考えられます。それを証明するように、昼夜の記述があり、また、経過日数を2倍にしても、望(満月)の月相値の差は、大きく変化しないことから云えるようです。そして、後世に太陰太陽暦に組み替えられたため、現アスス暦が完成したと推定されるようです。

表5 スス暦とアスス暦の暦法の比較

	暦法の基準と解説結果	区分	暦日の詳細な表示
スス暦	エト、穂、枝、鈴	古代暦	・年代は、エトを基準にした鈴枝穂で表示した一貫性あり ・年齢は、百万穂、十万穂で表示 ・朔、張、望(満月)、閏 ・昼、夜、初日、月など
		短所	・近代暦の知識が使用できない
	解説結果	吉田説	・スス暦は1日16穂であった ・約27鈴～、1日8穂に改暦あり トミ(臣)の在位年数が長大化
スス暦～アスス暦			・ワニヒコは、スス暦～アスス暦の御世に生き、192歳の記述あり
アスス暦	年、月、日、日エト	近代暦	・暦法は太陰太陽暦である ・年代は、アスス穂の年表示 ・歳は、現在人と同じく穂(歳) ・21ヶ月の妊み月 ・百歳以上の天皇が70%と多い ・不知火の現れる月日が昨今より3ヵ月早いなど
		短所	・近隣国と比較できない暦
	解説結果	吉田説	・歳、在位年数より2倍化暦と判断

Ⅳ、原アスス暦、1日の昼夜を2日とする数え方（吉田説）

アスス暦に改暦される前のスス暦では、1日を8穂で数えていたことは、すでに説明済ですが、原アスス暦も、1日の昼夜を2日で数えていたようです。その証拠に、ワニヒコの年齢が192歳であったことから云えるようです。

1、暦法上の運用方法

そして、暦法上は、1日を昼夜の2日とするため、ホツマ・エトでは、

(1) 1日に、仮「キアエ(1)」と「キアト(2)」を付与し、エトの一回りの60にしますと、1日の昼夜を2日で数えていた場合、(式) $60 \div 2$ 日の30日が経過した計算になり、1と月が計算できます。

(2) これを12回繰り返しますと、360日になります。太陽暦の365日に対しては、5日不足しますが、6年経つと、5日×6年で30日が補充できるようです。この30日は、1日を昼夜の2日としていたため、エトでは60になりエトも補充できます。詳細は表6を参照して下さい。

表6 原アスス暦の1日の昼夜を2日とした時の年とエト（吉田説）

年	月	日	累積日数	エト	累積エト	枝穂	実年
1年目	1月	30	30	60	60	1枝	0.08年
↑	2月	30	60	60	120	2枝	0.16年
↑	～	～	～	～	～		～
↑	12月	30	360	60	720	12枝	0.98年
↑	～	～	～	～	～		～
6年目	1月	30	1830	60	3660	61枝	5.01年
↑	～	～	～	～	～		～
↑	12月	30	2160	60	4320	72枝	5.91年
↑	13月	30	2190	60	4380	73枝	6年

2、春日（神）が考案した「1日の昼夜を2日」とした原アスス暦（吉田説）

このように、春日（神）のアマノコヤネが、暦法に精通していたとしても、スス暦は、ホツマ・エトを基本にしていた暦であり、そのことが、春日（神）が活躍した28アヤ（綾）5に「なれば ふた(二) エト キアエ(注記) より エ(枝) とホ(穂) と数え」と記述されております。また、その後の28アヤ（綾）65では、「時に春日・・・暦名をアスズとせんや」と記述されており、ホツマ・エトを基本に、アスス暦に改暦したと推定され、その際、「1日の昼夜を2日として、ホツマ・エトで数えていた」ことが無理なく推測できるようです。

(注記) ホツマ・エトは、キアエ、キアト、などと・・・と数えて行きます。

3、経過日数を2倍にした時の月相値の差

経過日数を1倍にした時の月相値の差は、I、4項で説明済ですが、次に、経過年数を2倍時した時の月相値の差を、下表7の右列(赤文字)に記載しました。

月相値の差(2倍時)

- (1) ±3日以内のズレ月は、アスス暦、儀鳳暦とも、約30年以内(経過年数)に治まるようです。
- (2) 経過年数が約60年超は、±4日～±22日でズレ月大です。
- (3) 見解

前述のように、経過年数を2倍時においても、ズレ月の「±3日月以内」は30年以内に治まっており、暦法上は問題ない範囲と許容されるようです。このことは、経過年数の1倍時とした「経過年数が70年以内でも僅かに3日月」とした時と月相値の差と同じでした。違いは、70年以内か、30年以内ですが、直近の10年以上は、古代でも昨今でも問題ならない年数と思われます。従って、「1日の昼夜を2日としていた」説が、原アスス暦に採用されていた可能性も否定されないようです。

表7 望(満月)の月相値の差と判定

NO,	ホツマツタエの記述	経過年	アスス暦		儀鳳暦	
	望～望の年月日		経過日数			
			1 倍	2 倍	1 倍	2 倍
			1 朔望月			
			29.530589			
			月相値の差			
(8)～(9)	790 年 12 月望～792 年 2 月望	約 2 年	0.00008	0.00017	0.166	0.332
(1)～(2)	133 年 1 月望～138 年 9 月望	約 5 年	1.251	2.502	-0.141	-0.282
(9)～(10)	792 年 2 月望～800 年 8 月望	約 8 年	-1.824	-3.649	-0.836	-1.673
(6)～(7)	703 年 2 月望～721 年 11 月望	約 18 年	-0.719	-1.439	-0.721	-1.443
(10)～(11)	800 年 8 月望～829 年 12 月望	約 29 年	0.434	0.869	-0.630	-1.261
(4)～(5)	514 年 3 月望～573 年 5 月望	約 59 年	-2.813	-5.626	-2.159	-4.319
(7)～(8)	721 年 11 月望～790 年 12 月望	約 69 年	-1.645	-3.291	-2.498	-4.996
(3)～(4)	445 年 1 月望～514 年 3 月望	約 69 年	-2.576	-5.153	-2.551	-5.103
(5)～(6)	573 年 5 月望～703 年 2 月望	約 130 年	-4.181	-8.362	-4.470	-8.940
(2)～(3)	138 年 9 月望～445 年 1 月望	約 307 年	-11.36	-22.72	-11.36	-22.72

V、アスス暦の2倍化暦論の是々非々について

これまで、アスス暦、日本書紀暦の2倍化暦論は、「日」の干支・エトを論じる段階で否定されて来ましたが、今回のように昼夜を2日で論じてもエトが仮に、「キアエ（順位番号1）」と「キアト（順位番号2）」と付与されるとした場合に、1月1日に「キアエ」から始められ、3月1日は、3順目の「キアエ」より始められます。このことは、現在の1日を1エトとした場合に、1月1日に「キアエ」から始められ、3月1日は、2順目の「キアエ」より始まることと同じエトになります。

このようにして、昼夜を2日に論じて運用して行く『春日（神）が考案した「1日の昼夜を2日」とした原アスス暦（吉田説）』は、1年を360日、720エトで数えて、エトが記録に残されることになり、アスス暦が運用されて行ったと思われます。延いては、このような原アスス暦で記録された720エトなどが、そのまま日の日数（暦日）と誤認され、後世に現アスス暦に組み替えた際に、その誤認のエトを日数と間違えて計算されたため、2倍化暦した現アスス暦が完成したものと思われます。

VI、編集後記

本原稿に記載しましたが、天文学的に計算された儀鳳暦と、アスス暦（太陰太陽暦）は、ほぼ同程度の精度であったことが確認されたようです。だが、暦の算出値を見ますと、儀鳳暦に対しアスス暦（太陰太陽暦）はバラ付き大きいようです。

この原因は、天文学的に、太陽の軌道、月の軌道を計算できず、太陽の動きと月の動きの差を差し引きできてないため、1年の日数を約384日、約384日、約324日と置かざるを得ず、1年の日数を平準化できなかったことに起因していると判断されます。また、ホツマツタエの暦日の記述に対し、約384日を算出する式の誤差が、「±1日以内」であるため、この影響もあるようです。

また、約384日を算出する式に天文学的な数値を利用しなかった理由ですが、ホツマツタエが記述された古代に、近代の天文学並の数値が判明していたか否かを自問した際、「なかった」との結論にしておりました。そのため、アスス暦の時代考証を優先に、スス暦、アスス暦の暦日の記述を式に取り入れて、逆算し、記述に一致する式を完成させました。ただ、計算式の組立は、現在の数学を利用させて頂いたのは云うまでもありません。

（おわり）